

吐蕃帝国のマトム (rMa grom) について

石川 巖

1 はじめに

古代のチベット統一王国、吐蕃がどのような行政単位で構成されていたかという問題は多くの研究者により論及されてきた。しかし吐蕃の広大な領域を諸行政単位によりなる構成体と見た上で、その全体像を示したような研究は、管見の及ぶ限り、最近の林冠群氏によるもののみである。

この林氏の研究は吐蕃王国成立以前においてチベット各地に存在した rgyal phran 「小王国」の王国成立後における歴史的変遷や吐蕃中央との関係などを示したものであるが、その結論で、林氏は吐蕃の国家体制において3つの制度が出現したと述べる。それらは第一に中央チベットに設けられた地方組織のル ru、第二にコンポ rKong po、ニャンポ Myang po などの藩国、第三に青海方面、バルチスタン、新疆、河西回廊方面などの khrom 「軍事行政区」すなわち植民地であるという⁽¹⁾。

林氏の見解に基づけば、中央チベットのル地域を本国、他の諸地域を属国ととらえ、吐蕃王国を巨大な複合国家、すなわち帝国とみなすことが可能となるが、果たしてそれは妥当であろうか。まず林氏の言う3制度の領域区分が吐蕃全土に当てはまるかという疑問が生ずる。林氏が取上げた諸小王国から吐蕃の全領域が構成されるわけではなく、東チベットや吐蕃の辺境地域の多くについてはそこであまり論述されていない。もし林氏の論証がすべて妥当であるとしても、それらの広大な地域に関する研究抜きで、そのような結論を提示するのは性急であると思われる。また、たとえその3区分が吐蕃全土に当てはまるとしても、帝国内における各地域の立場の多様性に留意し、各地の行政単位について創設の経緯、地理的位置と領域、帝国内における立場や役割などをできる限り示すことを試みなければ、吐蕃の具体的な帝国像を提示することは不可能であろう。そこで本稿はそのような試みの一環として、東北チベット方面の一地域に設けられたと思われるマトム rMa grom を取上げてみたい。

このマトムとは吐蕃のトム khrom の1つである。トムに関する従前の研究⁽²⁾により以下のことが判明している。トムは軍戸集合体の千戸により主に構成され、唐制の州をいくつか合わせた程度の領域を持つ軍管区であり、吐蕃の北辺東辺に設けられていた。8世紀後半において甘肅方面には、いくつかのトムから成るらしいデカム bDe gams 「幸いの国」が樹立され、デルン bde blon と称せられる4大臣で構成される bDe blon 'dun tsa 「デルン政庁」(別名 Zha'i 'dun tsa 「シャの政庁」) がその最高執政機関となっていた。

—吐蕃帝国のマトム (rMa grom) について—

そのような吐蕃の諸トムの中でマトムはどのような役割を果たしていたのであろうか。まずマトムの位置と領域を見出し、そしてその創設とその意義について考えることにする。

2 位置と領域

マトム rMa grom という名称から考えれば、grom は khrom の異綴と考えられるから⁽³⁾、マチュ rMa chu 「黄河」やマチェン・ポムラ rMa chen spom ra など、rMa と呼ばれる地域と結び付きのあるトム khrom がマトムであると推測される。

R. A. スタン Stein 氏は *mKhas pa'i dga' ston* 「学者の宴」Pa 章の7代カルマパ、チューダクギャンツォ・パーサンポ Chos grags rgya mtsho dpal bzang po (1454–1506) の東チベット巡行の記事に Ma khrom なる地がゴロク'Go log に位置付けられていることを示し、問題の rMa grom に比している⁽⁴⁾。同史料の関係箇所 (KG, Pa, 109a, ll. 1–3) を訳出して示そう。

[カルマパは] 虎の年 (1470 年) 10 月の 3 日からBUM BOL Bum 'bor の方面にいらっしやり、ニャクロン人 (Nyag rong ba) たちの旅税 (lam khral)⁽⁵⁾ が献ぜられた。デチェンテン bDe chen steng にいらっしやり、ゴロク・マトム 'Go log ma khrom などの大紛争をお鎮めになった。グンサル dGon sar の寺のかなり後方から礼拝なさり、内部に至り、御肖像たちの中にも大いに至り、2 日になった。それにより時間をかけてふさわしい雰囲気にしたところで、灯明を点し⁽⁶⁾、新年をお祝になった。

これによれば、1470 年、カルマパはニャクロン方面からデチェンテンなる地に赴き、ゴロク・マトムなどの紛争を鎮めた後、ホルコク Hor khog すなわち現カンゼ dKar mdzes 付近のグンサル寺⁽⁷⁾で1471年の新年を祝った。'Go log あるいは mGo log は民族名であるから、地名としてのそれらはその居住地域ということになる。そうであるならば、ゴロク・マトム 'Go log ma khrom とはゴロク族の居住地 Ma grom の意となる。

現ゴロク地方は黄河上流やマチェン・ポムラの地域であるが、果たして1470年当時もゴロク族の居住地は現在と同じであったであろうか。このことを調べるため、長くなるが、以下に *mDo smad chos 'byung* 「アムド仏教史」(DC, pp. 234–238) の記述を訳出したい。なお、そこに見える細かい地名の比定にはインドのダラムサラにあるアムニエマチェン研究所による地図 *rGya dmar gyi bTsan 'og tu gnas pa'i Bod dang Sa 'brel khag gi Sa khra* (略号 BS) を参照した。

ドチュ rDo chu の源がユツェ g-Yu rtse⁽⁸⁾の前から出て、それとゴロク・マチュ mGo log smra chu⁽⁹⁾、下手方面のラチュ Rwa chu⁽¹⁰⁾とツァワ三面の川 (Tsha ba kha gsum gyi chu)⁽¹¹⁾などのすべてがンゲーチュ dNgul chu と言われる大河⁽¹²⁾と交じり、ギャロン rGyal rong の方面を形成し、成都府 (Chin du phu)⁽¹³⁾に流れる。そこで、それらの流域の通りに次第に終りになるように書こう。(略) 現在、この地は大部分ゴロクに掌握されている。さて、バルカム Bar khams、南ゴロクの国からドウ'Bru 部族の長がやってきて、それで代々長をしてグコ'Gu kho の国に住む大長が前伝期からいた。ある時ドウハゲー

—吐蕃帝国のマトム (rMa grom) について—

'Bru lha rgyal という者が現れ、その子がアンプム A 'bum [である]。彼はカトク Ka thog⁽¹⁴⁾のラマとボンボ幾人かに法を授かったので、呪法を2つそろえて行う強力な呪術師とされた。国の長、地方の土侯と争って、国を追われ、ド rDo 沿岸の上手、ゲールン Gas lung のマモシムド Ma mo bzhi mdo など牧畜をして暮らしていた。そのとき、マル sMar 沿岸の上手はニエンツェ gNyan rtse の長、中間はカルレ mKhar re の長、下手はサレ Sa le の長の土地であった。(略) ドウ部族の長 ('thu dpon)⁽¹⁵⁾と民は疎まれたので、争いとなった。ニエンツェの長ハンチェンブム lHang chen 'bum が殺されたので、ニエン、カル、サの3つの地は降伏した。アンプムは部衆を率い、マルのゴムツォ sNgo mtsho 方面にやってきた。3子がおり、長兄はブムキャブ 'Bum skyabs、次兄はブムゲ 'Bum dge、末弟はブムヤク 'Bum yag [であった]。上の2人はそれぞれ家をなし、末弟は父の家で暮らしたので、ゴロク3面と言われ、ラチュの低地 (Rwa mdo) までを支配下に置いたので、「ゴロクのアンプム、彼は水をたたえた大湖のようである。チベットの某は湖岸の蜜蜂のようである」と歌われた。(略) ニエンの娘が手に入り、子の妻とした。名をニエンモ・ングードゥブ gNyan mo dngos grub と言った。(略) 長男が死に、その除難のために大般若経を書写するやいなや、ニエンモに子が生まれたのでブムキャブ 'Bum skyabs と [付けた]。また亥の年に生まれたのでパクタル Phag thar と付けた。(略) パクタルの治世ではニエンの神威によりマル沿岸母方六支の土地と部衆を支配した。偉大なるマル沿岸の谷口セルシヨン gSer gzhong とコレ・ガントク Kho le sgang thog に2つの城塞が築かれた。大明 (T'a'i ming) の宣徳 (Zon te) が唐老爺 (Thang lo ye) という万戸長の国を授けた⁽¹⁶⁾。彼には4子があり、1人はカトク寺のラマ、チューブム Chos 'bum である。長兄ドジェブム rDo rje 'bum にド沿岸の土地部衆、次兄ペーマブム Padma 'bum にジカ 'Dzi rka⁽¹⁷⁾の谷 (khog)、末弟ペーマヤク Pad ma yag にマル沿岸の土地部衆が与えられた。ンガコク rNga khog⁽¹⁸⁾の部衆、セルコク gSer khog⁽¹⁹⁾の税、ユ g-Yu とツァンコク rTsang khog⁽²⁰⁾の土地部衆などは共同で保持された。[パクタルは] 89才で逝った。ドジェブムの長男ブムチュクゲー 'Bum phyug rgyal と、末弟ワンチェンブム dBang chen 'bum。ブムチュクゲーに2子が生じ、その長男アキョン A skyong、これは強勢で権威が高い。

この訳文に基づきゴロク族成立期におけるその勢力範囲を示せば、ゴロク族集団はアンプムという人物を最初の首長として形成され、彼の時代の最大領域は、ドチュの上手、マルチュ、ラチュ流域であり、その孫のパクタル時代初期におけるゴロクの領域はマルチュ流域のみとなっていたが、大明の宣徳により唐老爺なる人物の所領である万戸が授けられ⁽²¹⁾、その領域が拡大したのである。訳文中にパクタルの諸子が支配した諸地域が示されるが、それらにはマルチュ流域だけではなく、ドチュ流域が含まれているので、おそらく唐老爺の万戸とはドチュ流域のことであろう。パクタルが長の時代の中葉あるいは後半に明の宣徳帝 (1425-1435) が万戸を授けたのであるから、長一代の統治期間を約30年と考えた場合、7代カルマパが 'Go log ma khrom の紛争を調停した1470年はパクタルの次代か次々代の期間

—吐蕃帝国のマトム (rMa grom) について—

に含まれる。ゴロク族の広域拡散はバクタルの曾孫であるアキョンの代より後に起こったのであるから、1470年ごろのゴロク族の勢力範囲はなおドチュとマルチュ流域と思われる。

これら2つの河川のうち、マルチュの地理的位置はマチュ rMa chu すなわち黄河に接近している。'Dzam gling rgyas bshad『世界詳説』も「マルコク sMar khog というのはゴロクの故国である。そこから北東、程ないところにマチェン・ポムラがある」としており⁽²²⁾、マルチュ流域が黄河上流 (rMa chu) 第1段の北方にあるマチェン・ポムラ rMa chen spom ra へのルートとなっていることが示される。ゆえに吐蕃時代のマトム rMa grom が rMa と呼ばれる地域と結び付いたトムであるならば、'Go log ma khrom はマルチュ流域であり、吐蕃時代のマトムの本部であり、マトムの領域はマルチュ流域から北方のマチェン・ポムラへ広がっていた可能性が浮上する。

チベット文語の語頭子音群 rm-、smr- は原チベット語 *mr- に由来し、またチベット文語において smra の語はしばしば smar と綴られるという見解がある⁽²³⁾。それに従えば、マルチュ sMar chu、マチュ rMa chu、マチェン・ポムラ rMa chen spom ra、さらに現ゾルゲ mDzod dge を流れる黄河支流メチュ rMe chu は原チベット語 *mra に由来する音節を第一要素に持つことになり、これらの地域から成る *Mra という大地域がチベット文語成立以前から認められていたことが示唆される。この *Mra 地域を統括したトムがマトムであると思われる。言い換えれば、マトムの領域は *Mra 地域、すなわち黄河上流第1段周辺地域に比定される。そのように考えると、次節で取上げる敦煌文献チベット文献『編年記』755年の条の記述とも符合する。

3 創設時期と創設意義

古くに J. バコー Bacot 氏と F. W. トーマス Thomas 氏は吐蕃王国に関する簡潔な3つの年次記録、すなわち P.T.1288、I.O.750 及び B.M.8212 (187) をまとめて“Annales”と題し、校訂テキストと訳を公表したが⁽²⁴⁾、筆者の言う『編年記』はその“Annales”に当たる。この史料においてマトム rMa grom の名は704年と755年の条に見える。704年の条には、

dbyard btsan po yab rma grom gyi yo ti cu bzangs na bzhugs shing/ yum khri ma lod yar 'brog gi 'o dang na bzhugste/ (I.O.750, ll.95-96)

夏、ツェンポの父上はマトムのヨティチュサンにいらっしゃり、母上のティマルーはヤルドクのおタンにいらっしゃって、

とあり、755年の条には、

blon khri bzang dang/ zhang stong rtsan gnyis gyis/ mkhar te'u cu phab/ rma grom phyir btsugste/ zhang mdo bzher rma grom gyi dmag dpon du bka' stsald/ (Or. 8212 (187), ll. 13-14)

論ティサンと尚トンツェン2人が洮州城を落とし⁽²⁵⁾、マトムが背後に設置されて、尚ドシェルがマトムの将軍に任命された。

—吐蕃帝国のマトム (rMa grom) について—

とある。

755年の条について、トーマス氏と王堯氏は“phyir btsugste”を「回復して」と訳するが⁽²⁶⁾、スタン氏の訳は「背後に設置して」であり⁽²⁷⁾、筆者はスタン氏に従っている。phyirには「背後に」の他に、「再び」の意味もあるから、確かに「回復して」の訳は成り立つ。そしてその訳を支持する理由も見い出すことができる。まず『編年記』704年の条にすでにマトムの語が見えているから、704年にはマトムが存在していたと考えることが可能である。そう考えたならば、755年におけるマトムの成立はありえない。さらに『新唐書』「吐蕃伝」天宝十年(751年)の条には「哥舒翰破洪濟、大莫門諸城、収九曲故地、列郡縣矣」(『新唐書』卷二百一十六上・吐蕃伝上、中華書局版、p.6087)とある。九曲、洪濟城及び大莫門城の地理的位置については論争があったが、結局、鈴木隆一氏が九曲をウランブラク川流域とし、佐藤長氏がこれに賛同し、洪濟城や大莫門城をその地域内に置かれた城塞としたことで落着した⁽²⁸⁾。ウランブラク川は青海南山の東端付近から南東に流れ黄河に注ぐ短い河川である。引用した『新唐書』の記事は唐が吐蕃からその流域を奪取したことを伝えているのである。このことと結び付けて『編年記』755年の条を考えると、755年に吐蕃がこの地を唐から奪い返したことが「マトムを回復して」で示されたのではないかと考えたくなる。

しかし安易にその解釈を受け入れず、もう少し深く検討を進めてみよう。山口瑞鳳氏によれば⁽²⁹⁾、敦煌チベット文献のうち史伝類が成立したのは8世紀末、すなわち吐蕃東北辺に諸トムが設置されており、青海はおろか甘肅方面にまでの吐蕃支配体制が確立していた時代である。当然このころもマトムは存在していたと思われる。またマトムが吐蕃王国崩壊後の10世紀前半にもなお独立した勢力として存在していたことは敦煌文献チベット語外交文書P.T. 1082が証言している⁽³⁰⁾、マトムが755年から8世紀末ごろまでの間に廃棄されたという可能性はさらに認めがたい。つまり『編年記』が成立した時点にはマトムが存在していたわけであるから、現在マトムの地域という意味で、704年の条にマトムの語が使用された可能性がある。しかも同じ『編年記』の名のもとでまとめられているとはいえ、704年の条と755年の条は同一文献に記されているわけではなく、それぞれI.O.750とOr.8212(187)に記載されているわけであるから、Or.8212(187)では755年の条で初めてマトム rMa gromが登場することになる。もし両条が同一文献内に記されているならば、後年次の記事の方が成立を伝えたというのは奇妙であるが、記されているところの文献がそれぞれ違うのであるから、755年の条がその年にマトムが成立したことを伝えているとして問題はないのである。また前節での検討結果に従えば、751年に唐が吐蕃から奪取したウランブラク川流域はマトムの領域ではない。マトムはその南方の黄河上流第1段周辺地域である。ゆえに751年にそこまで唐が進出したとは考えられず、755年におけるその地の回復もありえないということになる。

ここでスタン氏の訳のように“phyir btsugste”を解し、755年にマトムが洮州の背後に設置されたとしてみよう。吐蕃側から見たその後背地すなわち洮州の南西方にあるのはメチュ rMe chu、マチュ rMa chu「黄河」及びマルチュ sMar chuの地域であり、前節で導き出したマトムの領域に符合するのである。ゆえに筆者はトーマス氏と王堯氏の解釈を採らず、スタ

—吐蕃帝国のマトム (rMa grom) について—

ン氏に従ったのである。

スタン氏と筆者の解釈が妥当であるとすれば、『編年記』755年の条はマトムの創設を伝えた記事とみなしうる。引用した記事の直後にはドメーの夏会議 (mDo smad gyi dbyar 'dun) に関する記事があり、また吐蕃暦の年始は季春 (唐暦で言えば孟夏すなわち四月) であるので⁽³¹⁾、唐暦の755年四月をマトムの創設時期としてよいであろう。755年すなわち天宝十四年は安祿山の乱勃発の年であり、その十一月甲子が安祿山挙兵の日付けである⁽³²⁾。吐蕃としては751年の敗退を巻き返すべく軍管区であるマトムを創設し、対唐進撃の準備をしたのであろうが、マトム創設直後という願ってもない時期に安祿山の乱が発生したのである。この吐蕃の類稀なる幸運が8世紀後半におけるその急速な甘肅征服を導いたに違いない。広徳元年(763)年十月には吐蕃軍による長安占拠が起こったが、これが容易になされた原因について、佐藤氏は、安祿山の乱鎮圧のため西北辺の防備兵が東方に転進したことと、宦官の程元振により軍令系統が乱されていたため、事件の際に唐軍が集結しなかったことを挙げている⁽³³⁾。それら2つの原因のほかに、筆者は安祿山の乱直前にマトムが創設され吐蕃軍の東方侵攻に向けての準備が整っていたことを挙げたい。結果的にマトムはその時期の吐蕃軍による甘肅征服及び中原侵攻における最初の拠点となったのである。

4 おわりに

マトム rMa grom の地理的領域すなわち黄河上流第1段周辺地域はチベット内地から甘肅への幹道を内包している。その本部が置かれたと推測されるマルチュ sMar chu 流域はカム東部やアムド南部をアムド北部へと結び付ける交通の要所である。また佐藤氏は入吐蕃道が黄河源近くの現マド rMa mdo 付近を通っていたとしている⁽³⁴⁾。チベットと甘肅を結び付ける交通拠点であるこの地域の軍管区化は吐蕃軍が甘肅征服を効率的に進めるためになされたと思われる。それはまた8世紀後半中の甘肅に吐蕃のデルンの大領国 (bde blon khams) すなわちデカム bDe gams⁽³⁵⁾が成立した一因とも言えよう。10世紀前半の外交文書 P.T.1082 はマトムの使者が甘州ウイグル可汗の御前で奏した言葉として「マトム万戸はシャ zha として見られる」⁽³⁶⁾を記載するが、冒頭で述べたように吐蕃時代にデカムを統治していたデルン政庁 (bDe blon 'dun tsa) はシャの政庁 (Zha'i 'dun tsa) と呼ばれるから、マトムは河西の支配者たるデルン政庁とみなされるという意味でその言葉は言われたのかもしれない。もしそうであるならば、それは、マトムが吐蕃時代にデカム成立に先駆けて設けられた甘肅征服における最初の拠点であったという、その成員たちにとって誇るべき史実が言わしめた言葉かもしれないとも思えてくる。

筆者はマトムの領域を *Mra 地域と考えたが、その地域の地理的領域についてあまり考察を深めることができなかった。そのチベット史料からのアプローチとしては、東チベットをその舞台とした『ケサル叙事詩』の伝説的地理情報などを探ることが有効と予測される。その漢文史料からのアプローチとしては、吐蕃支配を被る以前の黄河上流第1段周辺地域における部族勢力に関する情報を漢籍から求める道がある。今後そのような蔵漢両方面からのア

—吐蕃帝国のマトム (rMa grom) について—

プローチにより*Mra 地域の地理的領域についてさらに研究を進め、それによりマトムの地理的領域を再検討したいと思う。

引用文献

BS = *rGya dmar gyi bTsan 'og tu gnas pa'i Bod dang Sa 'brel khag gi Sa khra*, Amnye Machen Institute, (Dharamshala) , 1998.

KG = *Chos 'byung mKhas pa'i dGa' ston*, Karmapae Chodey Gyalwae Sungrab Partun Khang, 1980. Reproduced from prints from the lHo Brag blocks from Rumtek Monastery.

DC = *mDo smad Chos 'byung*, 甘肅民族出版社、蘭州、1982.

『果洛志』 = 果洛藏族自治州地方志編纂委員会編『果洛藏族自治州志』民族出版社、北京、2001.

『青蔵地図』 = 中国科学院地理研究所主編『青蔵高原地図集』科学出版社、北京、1990.

『分省地図』 = 『中華人民共和国分省地図集』(第3版)、中国地図出版社、上海、1988.

Bacot, J. ; Thomas, F. W. ; Toussaint, Ch.

1946 *Documents de Touen-houang relatifs à l'histoire du Tibet*, Paris.

Coblin, W. S.

1974 "An Early Tibetan Word for "Horse"", *Journal of the American Oriental Society*, 94-1, pp. 124-125.

Lalou, M.

1955 "Revendications des fonctionnaires du grand Tibet au viii^e siècle", *Journal Asiatique*, pp. 171-212.

Rock, J. F.

1956 *The Amnye Ma-chhen Range and Adjacent Regions*, Rome.

Simon, W.

1975 "Tibetan Initial Clusters of Nasals and R", *Asia Major*, 19-2, pp. 246-251.

Stein, R. A.

1959a *Les tribus anciennes des marches Sino-Tibétaines*, Paris.

1959b *L'épopée et le barde au Tibet*, Paris.

Uray, G.

1979 "Khrom: Administrative Units of the Tibetan Empire in the 7th-9th Centuries", *Tibetan Studies in Honour of Hugh Richardson*, Oxford, pp. 310-318.

Wylie, T. V.

1962 *The Geography of Tibet according to the 'Dzam-gling-rgyas-bshad*, Rome.

王堯・陳踐

1992 『敦煌本吐蕃歷史文書』(增訂本)、民族出版社、北京。

王忠

1958 『新唐書吐蕃伝箋証』科学出版社、北京。

吳均・毛繼祖・馬世林

1989 『安多政教史』甘肅民族出版社、蘭州。

佐藤長

1959 『古代チベット史研究』下、同朋舎、京都；再版、1977.

1978 『チベット歴史地理研究』岩波書店、東京。

1991 「河西九曲の地再論」『鷹陵史学』17、pp. 39-51.

—吐蕃帝国のマトム (rMa grom) について—

鈴木隆一

1983 「吐谷渾と吐蕃の河西九曲」『史観』108、pp. 47-59.

武内紹人

1990 「中央アジア出土古チベット語家畜売買文書」『内陸アジア言語の研究』5、pp. 33-67.

森安孝夫

2000 「河西帰義軍節度使の朱印とその編年」『内陸アジア言語の研究』15、pp. 1-122.

山口瑞鳳

1980 「吐蕃支配時代」『講座敦煌』2、大東出版社、東京、pp. 195-232.

1982 「チベット史料の年次計算法」『東洋学報』63-3・4.

1983 「吐蕃王国成立史研究」岩波書店、東京.

林冠群

2000 「唐代吐蕃的傑琛」蒙藏委員会、台北.

註

- (1) 林 2000, p.70-72, p.76 参照。
- (2) Lalou 1955, p.188; Uray 1979; 山口 1980, p.203; 武内 1990, p.39 参照。
- (3) rMa grom の第 2 要素が khrom と綴られた例は知られていないが、khr-と gr-の交代は古代文献においてよく観察される。
- (4) Stein 1959a, p.30; 1959b, p.213-215 参照。
- (5) カルマバの旅に充当される税の意か。
- (6) ras bud は ras 'bar 「灯の芯」を 'bud 「燃やす」と解した。Chos kyi grags pa 氏の『蔵文辞典』p. 823 参照。
- (7) この記事の少し後でカルマバはホルコクの有力者たちから招待を受けるので疑いない。Wylie 1962, p. 104 も参照されたい。なおアムドとカム東部には "...khog" という名称の溪谷が多い。そのような "khog" の語は中国語「谷」が外来語化して成ったと思われる。
- (8) バヤンカラ山系の 1 山か。J. F. ロック Rock 氏はゴロクの聖山 Nyen po yur tse dza ra を北緯 33 度 30 分、東経 101 度付近に位置付けるが、ドチュの源はさらに西の東経 100 度付近にあるから、これは別の峰であろう。Rock 1956, p.125, map 5 参照。
- (9) smra は後に見える smar の異綴。この綴の変異現象については本節末尾で述べたい。
- (10) ドチュとマルチュは黄河上流第 1 段の南方にあるバヤンカラ山脈から南へ流れ、合流して大金川を形成する多柯河と麻爾柯河に相当するが（『分省地図』p.93, 122）、『アムド仏教史』では麻爾柯河の下手部分をラチュと呼んでいる。
- (11) ソマンチュ So mang chu のこと、この史料ではツァチュ Tsha chu と呼ばれる。DC, p.771 には「ツァチュの流域に教法の城壁ツァワ 3 部と讚えられた都がある」"tsha chu'i rgyud du bstan pa'i lcags ri tsha ba khag gsum du bsngags pa'i rgyal sa yod" とある。
- (12) 怒江ではなく大金川のことである。DC, p.779 に「現在ギャロンの大川にも女王のングーチュという」"deng sang rgyal rong chu chen la yang rgyal mo'i dngul chu zer" とある。
- (13) 実際は大渡河あるいは長江として成都府の領域よりも南方の南四川を流れる。
- (14) ニンマ派のカトク寺のことであろう。

—吐蕃帝国のマトム (rMa grom) について—

- (15) 'thu は 'bru の誤記と解した。
- (16) 「大明の宣徳」と「唐老爺」の訳は呉均 1989, p.226 に従った。
- (17) ジカについては、DC, p.238 に「ジカ方面にはチュージェ・ドゥーウォパの直弟子クンチョクサンが建てたザムタン寺などがある。」“ 'dzi rka phyogs la chos rje dol bo pa'i dngos slob dkon mchog bzang gis btab pa'i 'dzam thang chos sde sogs snang” とあるので、この地がザムタン付近であることがわかる。また DC, p. 237 に「ドチュとジチュの交わるドチュ上手」“rdo chu dang 'dzi chu 'dres pa'i rdo chu'i stod” の文句が見えるから、ジチュなる河川がドチュに流れ込んでいることも知れる。BS を見るとザムタンの北西にカムダ rKa mda' 「カの谷口」という村が隣接している。また『青蔵地図』 pp.6-7 の「自然景観図」を見ると、ザムタンはドチュの流れが南東から真南へと向きを変える地点に位置し、そのすぐ上手で小河川が西からドチュへ流れ込むことにより肥沃な地となったらしいことが見て取れる。その小河川がおそらくジチュであり、ジチュとドチュの交叉で拓けた溪谷がジカなのであろう。
- (18) ラチュの支流のディンチュ lDing chu の支流、現アバ rNga ba を流れるンガチュ rNga chu がなす溪谷のことである。ンガチュ、ディンチュ、ラチュの位置関係については DC, p. 767 の「ラチュとディンチュが交わる境目」“rwa chu dang lding chu 'dres mtshams” や DC, p. 768 の「ディンチュとンガチュが交わる境目」“lding chu dang rnga chu 'dres mtshams” という文句で明らかである。
- (19) 現セルタル gSer thar を流れるドチュの大きな支流の溪谷のことである。
- (20) この2つはドチュ下流に流れ込む2つの支流が成す溪谷のことである。
- (21) この出来事は、民間伝説、『アムド仏教史』及び *mGo log Rus mdzod* 『ゴロク族譜』の記載に拠ったとする『果洛志』『果洛宗族直系世襲沿革』で、チベット暦第7ラブチュン己酉年 (1429) のこととされている (p.1096)。
- (22) Wylie 1962, p.44, p.105 参照。
- (23) Stein 1959a, pp.50-54 ; Coblin 1974, pp.124-125; Simon 1975, p.246 参照。
- (24) Bacot 1946, pp.9-75 に収録されている。
- (25) この吐蕃の洮州占拠は一時的であった。『編年記』はこの記事の直後、ドメー mDo smad の夏会議、洮州 (te'u cu) への進軍、冬会議の順に記述を進めている。このことはこの年の春に吐蕃が洮州を一応占拠したが、保持できず、夏から秋の間に再び洮州へ軍を進めたことを示している。最終的に洮州が吐蕃の手に落ちたのは諸漢文史料 (『元名郡県図志』卷三十九・隴右道上, 中文出版社版, p.544; 『旧唐書』卷十一・代宗紀, 中華書局版, pp.272-273; 『資治通鑑』卷二百二十三・唐紀三十九, 中華書局版, p.7146) が示す広徳元年 (763) 秋七月であろう。なお『新唐書』「吐蕃伝」があたかもその翌年の事件であるかのようにこれを伝えているが、誤りであることについては王忠 1958, p.87 に述べられている通りである。
- (26) Bacot 1946, p.63; 王堯 1992, p.155 参照。
- (27) Stein 1959a, p.30 参照。
- (28) 鈴木 1983, pp.54-56 ; 佐藤 1991 参照。
- (29) 山口 1983, p.66-67 参照。
- (30) P.T.1082, l.9 にマトム rMa grom が2度見える。森安孝夫氏によれば (森安 2000, pp.81-85)、その文献の成立時期は 932-934 年のいずれかの夏である。筆者の考えでは、別稿で論じる予定であるが、934 年の夏である。いずれにしてもそれを 10 世紀前半の成立とすることに変わりはない。
- (31) 吐蕃暦については山口 1982, pp.141-144 参照。

—吐蕃帝国のマトム (rMa grom) について—

- (32) 『資治通鑑』卷二百一十七・唐紀三十三、中華書局版、p.6934 参照。
- (33) 佐藤 1959, pp.561-563 参照。
- (34) 佐藤 1978, p.147 参照。
- (35) デカム bDe khams は敦煌チベット文献『年代記』(P.T.1287, l.384) で bde blon khams chen po 「デルンの大領国」と表現されている。
- (36) rma grom khri sde cig zha du blta (P.T.1082, ll.9-10)。